

私は今回の教育実習で様々な経験をさせていただき、そこから多くのことを学んだ。本レポートでは特に印象に残っている事柄を三点述べていく。

一つ目は授業に関することである。今回の実習期間中で合計21回の授業をさせていただき、国語の授業、特に小説の授業を作ることの難しさや奥深さ、楽しさなどを学び感じる事ができた。教材は高校国語の定番教材である、中島敦の『山月記』で、私は序盤から中盤辺りまでを担当した。授業を制作するために、担当教諭や他の先生方のお話を伺った時、それぞれの教え方や重視している点に大きな差があったことに驚いた。そして小説の授業の幅広さを実感し、同時に難しさと奥深さを感じた。この経験の中で私は小説の授業準備における大切なことを学んだ。それは教材を多角的な視点で読み込むということである。多角的な視点とは、教材を理解するのに重要な部分はどこか、自分は教材のどこをおもしろいと感じるか、生徒はどこをおもしろいと感じるだろうか、といった視点である。授業を制作していく過程で小説の授業の幅広さを感じ、改めて自分の授業を振り返ると、自分がいかに偏った読み方で授業を作っていたのかが理解できた。様々な教え方がある小説の授業を偏ったものにしないうためには、教材を多角的な視点で読むことが重要になると思われる。このように私は授業を作るという経験を通して授業準備の大切さとその方法を学ぶ事ができた。

二つ目は学級運営に関することである。今回の実習期間中、私は担当教諭が担任をしているクラスに参加させていただき、ホームルームや行事の準備、探究の時間の補助などをさせていただいた。そしてクラスでの活動があったその度に、担当教諭からクラスの生徒一人一人の生徒観を伺い改めて生徒を観察すると、いかに担当教諭が生徒のことをよく見ているのかが理解できた。しかしそのような先生でもクラスを運営に多くの問題を抱えている様子が見受けられた。この経験から約40人の生徒を相手にする学級運営の難しさを肌で感じ、また担当教諭のお言葉から生徒とかわる上で非常に重要なことを学んだ。それは先生、すなわち自分がどれだけ損をしたとしても、生徒が得をするように行動するということである。これは当たり前のことであると理解していたが、先生方の姿勢を見てその大切さを痛感した。このように先生方やクラスと関わる中で、教職に就く上での大前提となる部分を深く学ぶ事ができた。

三つ目は学習指導要領の改訂に関することである。今年の教育実習は一年生のみ新学習指導要領が適用されており、その変化を体験するようにと校長先生から助言を頂いていた。私は国語科に限らず、社会科や英語科の一年生の授業を見学させていただき、それぞれの変化について先生方と積極的に話し合った。この経験を通して学んだことは、特に国語科は大きな転換点を迎えているということである。このことは大学の講義で頻繁に触れられていたが、想像していた以上に現場は混乱し、手探り状態で授業が行われていた。しかしある程度は方向性が定まってきた様子が伺え、私がかここからどのように勉強していくべきかを明確にすることができた。このように授業見学や先生方との会話を通じて、教育現場の変化をより現実的に考え、学ぶ事ができた。

以上のように印象に残っている事柄を三点ほど述べたが、いずれも現場でないと学べないことばかりであった。今回の貴重な経験から学んだことを活かして、いい教員になって子どもをより良く育

めるよう日々努力していく。